柳ケ瀬 万華鏡

映画人生模様 ㊤

素直に生きる 最期まで

一九七〇年代には十以上の映画館が並び、映画のまちとしてにぎわった岐阜市の柳ケ瀬商店街。テレビやインターネットの普及で徐々に姿を消し、今では二館のみとなったが、地方都市の街中に映画館があるのは珍しく、芸術文化の灯を守り続ける。その一つ「シネックス」を舞台に、映画を愛する人々の人生模様を紹介する。

◇

チャイムが鳴ると、上映室の照明がぱっと消えた。始まったのは、黒沢明監督の名作映画「生きる」をノーベル賞作家カズオ・イシグロさんの脚本でリメークした「生きる―LIVING」。「どうしても見たかった」。大垣市議の種田昌克さん(ま)は、特別な思いでスクリーンを見つめた。

黒沢の「生きる」は、無気力な毎日を送っていた市役所の市民課長・渡辺勘治が胃がんで余命わずかと知り、市民から要望のあった公園の整備に奔走する物語。原作を基にしたリメーク版は第二次世界大戦後の英国が舞台だ。

死期が近づく中、自らが完成させた公園のブランコに乗り、満たされた表情を浮かべる―。クライマックスシーンの主人公の姿を見て、種田さんは自らの半生を振り返った。

■ ■

大垣市で生まれ育った種田さん。高校生や浪人生の頃、当時は「文化のまち」としていくつもの映画館などがひしめいていた柳ケ瀬に何度も通った。早稲田大文学部へ進学し、映画や舞台の美術を学び、自主映画の制作にもめり込んだ。

大学卒業後は「地域の人のために働きたい」と大垣市役所に入庁した。人のためにという思いには、菓子やジュース、たばこなどを売る店を営んでいた父・恒夫さんの影響があった。種田さんが店の手伝いで父の配達についていくと、父は必ずジュースの瓶一本一本を布できれいに拭いて冷蔵庫に並べた。「お客さんが口をつけて飲む商品だから、きれいに磨いて、一番おいしそうに見えるように並べんとあかんのやで」。いつも相手のことを考え、仕事に手を抜かない姿がかっこよかった。

市役所の新人職員として同期と肩を並べ、当時の助役から訓示を受けた。その時、助役が引き合いに出したのが、映画「生きる」だった。主人公の渡辺は人生の最期になって自分が「正しい」と信じた仕事をやり抜いたが、助役は若いころに担当した税金の滞納整理で、貧しい家庭から徴収したことが正しかったのか、何十年も考え続けていると語った。もともと「生きる」を見て「市職員とはこうあるべきだ」と思っていた種田さん。助役の話を聞き、身の引き締まる思いがした。

最初に配属された文化部は自由な気風で、上司からは「種田君の好きにやっていい」と言われた。当時、大垣市には映画館がなかったため、月一回、市の施設で映画を流す「金曜シネマ」を企画した。毎回二百人ほどが集まり、評判を呼んだ。好きな映画と仕事が結び付き、市民も喜んでくれる。やりがいを感じた。

■ ■

四十歳を過ぎた頃、大垣輪中水防事務組合へ出向した。当時、神戸町が堤防を切り割りして町道を通す事業を進めていたが、治水への影響を懸念する地元自治会が反発。組合は町の事業に同意していたが、種田さんは疑問を感じた。堤防は命を守る防災施設。それを切ることが住民のためになるだろうか。地域の人のために働きたいと思っていたのに、住民と対立する日々。ストレスで髪が抜けるようになった。

ある日、職場で狭心症で倒れ、緊急手術を受けた。医師からは「あと少し遅かったら死んでいた」と告げられた。「せっかく拾った命。本当に自分が正しいと思うことだけをしよう」。地元自治会と和解した後、四十七歳で退職。国会議員の秘書を経て、大垣市議になった。組織の中で働く市役所職員とは違い、議員なら一人で自由に活動でき、自分の気持ちに素直でいられると思ったからだ。

■ ■

今春の統一地方選で二回目の当選を果たした後、ほどなくして脳梗塞で寝たきりだった父が亡くなった。そんな時、いつも映画を見にきていたシネックスで、「生きる」をリメークした新作映画が上映されることを知った。あらためて自分の原点に立ち返ろうと、足を運んだ。

「あの主人公のように、満足して死ねたら」。今も映画のシーンを思い出すたび、問い掛けられている気がする。あなたにとって「生きる」とは―。

❷映画「生きる LIVING」のパンフレットを手に人生を振り返る種田さん
❸シネックスが入るビルの外観。映画のまちだった柳ケ瀬の面影を今に伝える
―いずれも岐阜市日ノ出町で